

淨土

1979-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 遷移省 (別表承認雜誌) 第三二五号
昭和五十四年五月二十五日印刷 昭和五十四年六月一日発行

第四十五卷

第六号



S. Kuz

今こそ情操教育を

——健全なる育成のために

このところ青少年の犯罪が急増している。

些細な事例をあげれば枚挙にいとまないほどで、ついには友だち同士の殺傷事件まで起きている。恐ろしい世の中となったものだ。

こうした風潮を呼び起こした原因は、一体なんであろうか。専門家の間でも議論の分れ

一例をあげよう。

スーパーマーケットの進出とともに物品の購入方式が一変した。顧客は自分の求める品を備え付けの籠に入れ、レジで一括支払いをする方式が定着してきた。これによって、児童・生徒の間に万引が横行するようになってきたという。それも、



ているところで、深刻な社会問題にまでなってきた。

私考するに、罪意識の低下があげられる。

なく、そこには罪意識のかけらもない。それどころか、スリルを味わうゲーム的感覚でなされていることに注目しなければならぬ。それでは、こうした子供たちに善行を促すことは無理であろうか。そうは思わない。

戦後、急変した社会情勢の中に育った人々の二世に起っている、この社会問題。この辺にも遠因がありそう。子はかすがい、といわれる。たしかに子を持つ親の生きがいは「わが子」である。この子は、最も身近にいる両親を手本とし、その良し悪しの判断もつかぬまま、すべてをまね、学びとって育っている。しかし、はたしてこの親をして、その手本となり得るような人生を送っているだろうか。いささか不安である。

今日、物質文明の充実さは、たしかに見張るものがある。が、精神的な面は欠如の一語に尽きる。今こそ、明日を担う子供たちの健全なる育成のために、大人たちは真顔になるべきであろう。その根幹は、いうまでもなく宗教的情操教育である。心豊かな人間に育てあげることこそ、大人に課せられた大命題であるからだ。

(長谷川宣丈)

六月号



回向とは、雑行を修する者は、必ず回向を用いるの時に、往生の因となる。

——『選訳本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.30-1)

目次

迅速なる念仏弘通……………村瀬 秀雄……(2)

法 話

大師法然上人を慕いて……………山田 和雄……(6)

昭和三十三年のころ……………山田 静郎……(10)

〈随想〉ほとけとの出会い(二)……………佐竹 隆三……(14)

〈連載〉

六時礼讃の「無常偈」に生きる(3)……………安居 香山 ……(18)

善導大師の生涯とその教え(7)

伝道教化…………… ……(22)

〈読者の声〉信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(七)……………吉村 孝……(32)

法然上人の弟子たち⑩

津戸三郎為守のこと〔六〕……………梶村 昇……(25)

浄土句集……………一田 牛畝 選……(30)

〈表紙裏・巻頭言〉 今こそ情操教育を……………長谷川 宣丈

念仏ひじり三国志② ——法然をめぐる人々……………寺内 大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



迅速なる念仏弘通

村瀬秀雄
むら せ ひで お

法然上人は学徳兼備の名僧として、日増しに世評を高
くしていた。それにも拘らず自らを厳格に律していた上
人は、「わがこの身は、戒行において一戒をもたず、
禪定において一もこれをえず、智慧において断惑証果を
えず」といわれていた。そして既存の宗門の中からは、
ご自分の信仰に合致する法門を遂に求め得なかったとし
て、「ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学のうつは
ものにあらず。この三学の外にわが心に相應する法門あ
りや。わが身にたへたる修行やあると、よろづの智者に
もとめ、もろもろの学者にとぶらひしに、おしゆる人も
なく、しめすともがらもなし」と述懐している。

このお言葉は開宗以前の心境を聖光房に伝えたもので

あるが、上人が既成宗門を捨てて、新たに浄土宗をたて
ねばならなかった理由を述べたものである。それまでの
仏教は戒定慧三学を修行することであった。従って仏教
を修行することのできる者は高德の智者、碩学の学者で
あると同時に、揺ぎない修行に邁進できる聖者に限られ
ていた。このような仏教では一般庶民にとって望んでも
果たし得られない修行であり、高嶺の花であった。仏教
が格別に恵まれた素質と環境を持つ者だけのものではあ
ってはならない。法然上人が一般庶民のために往生と成仏
の法門を開いたことは、誰でも仏教を信じて修行できる
という革命的な転機をもたらしたものである。上人によ
れば、庶民にとっては持戒でもなく破戒でもなく、無戒

のままでいるしかないと言われていた。また常々弟子たちに、「近來の行人、觀法をなす事なかれ。仏像を觀ずとも運慶、康慶が造たる仏程だにも觀じあらはすべからず。

極樂の莊嚴を觀ずとも桜梅桃李の花葉程も觀じあらはさん事かたかるべし」といわれていた位である。かりに庶民が禪定を修行したにしても、決して定の境地が得られないのであるから、觀相は無駄事にすぎないとしていた。學問を積むことは結構なことに相違ないが、學問がなければ成仏できないというのであったならば、廣く庶民のための仏教とはいひ難い。ところが念仏を唱えるのに特別な智慧を必要としないのであって「智者は智者にて申てむまれ、愚者にて申てむまる」のであるから、智者の念仏と愚者の念仏とは何んらの差別もないのである。念仏往生は仏の慈悲によって遂げられるのであり、行者の智慧のあるなしによって仏が行者を区別し給う筈がないのである。これまで戒定慧とは全く無縁のままで暮してきた庶民たちが、上人の勧めに従い、そのままの姿で至心に念仏を唱えたのである。今まで高嶺ばかりを眺めてきた人々が、上人に教えられて足下をみると、そこには一層華麗な花が咲き誇っていたことを初めて知っ

たのである。

法然上人が專修念仏を勧進し、自らも念仏を唱えていると、蜂が蜜を慕って花に集まるように、いつか吉水の庵室には門前市をなす賑いを呈することになった。當時の様子について勅修御伝に、「東山吉水のほとりに、しづかなる地ありけるに、かの広谷のいほりをわたして、うつりすみ給。たづねいたるものあれば浄土の法をのべ、念仏の行をすすめらる。化導日にしたがいてさかりに、念仏に帰するもの雲霞のごとし。そのち加茂の阿原屋、小松殿、勝尾寺、大谷などその居あらたまるといへども、勸化をこたることなし。つるにほまれ一期にみち、益四海にあまねし」と伝えている。人々が念仏の法門に雲集したことは、當時の世相に適合したからであると説く者があるが、もしそれだけであったならば、念仏信仰も時代と共に変遷していた筈である。そうではなくて從來庶民にとって力の及ばなかった仏教修行を、初めて自らの両手に握ることを得させたのである。上人は選撰集の結びにおいて、次のように述べている。「今日に

至るまで自らは一向に専ら念仏を相續して暮し、他の人に向つてはひたすら念仏の功德を説いてきた。時によつて煩惱と穢れとに満ちた苦海から抜け出せる出離の要門を尋ねる者があれば、その者に極楽浄土に往生できる法門を示してきた。往生するための修行について尋ねる者があれば、その者に余行を捨てて専ら念仏を相續して往生を願う本願の行を説いてきた。すると殆んどの人が念仏の法門を信じ、直ちに念仏一行の信仰生活に入るのであった。稀には聞いても信じない人もあったが、数からいえば極めて僅かな人々に過ぎなかつた。このことによつて念仏の法門がいかに時代に適した教えであり、末代の人々の願いに叶つた法門であるかということが判る。まさしく今は念仏の一行が広くに行き渡り、すべての人々が行益を蒙る機運に際会している。阿弥陀仏は無量無辺の光明を放つて十方の世界を照らし、念仏を唱える者を一人も洩らさずに攝取し給うている。こうした姿は月と水との関係に似ていて、たとえば空中に皎々と輝く月があれば、どここの水面にも月の光りがきらめいているのと同じことである。月が地上に降りたわけでもなく、水が天上に昇つたわけでもないのに、月と水とが一体とな

つて水面に清らかな輝きを宿している。それと同じように念仏を唱えれば仏の本願力に乗ずることができるのであるから、仏と行者とは一体となつて往生できるわけである」

己れの信仰に黎明を見出した庶民の喜びが大きかつただけに、念仏の法門は迅速に全国に弘通して行つた。例えば元久二年上人七十三才の時に貞慶が念仏停止を訴えるために、興福寺奏状を認めたが、その中で「北陸東海等の諸国に至つては、専修の僧尼盛んにこの旨以てす」と記している所をみても、その地方に早くも念仏を唱える人々が多きことがわかる。また承元三年上人七十七才の時に越後の光明房に対して一念義を斥ける書状を送っているので、遠く北国に邪義までが喧伝されていたことがわかる。

念仏信仰の聖典である選択集は早くから印刷に付する計画がたてられた。平基親の序文は建暦元年十一月上人七十九才の時に記したとあるので、印刷の計画はそれ以前から進められていたことにある。この頃の上人は遠流

赦免があつて勝尾寺まで帰ってきたが入洛を許されず、他方においては一念義等の邪義もあつて、弟子たちの間に早くも印刷に付する計画が進められたのであらう。しかし印刷刊行されたのは翌二年九月のことで、その時には上人はすでに西方に往生された後であつた。すると早くも同年十一月には高弁が摧邪輪を著して選択集を非難した。高弁はその中で「高弁、年来聖人において深く仰信を懷けり。聞ゆるところの種々の邪見は在家の男女等の、上人の高名を仮りて妄説するところとおもいき。いまだ一言を出しても上人を誹謗せず。たとえ他人の談説を聞くと雖も、いまだ必ずしもこれを信用せず。しかるに近日この選択集を披閱するに悲嘆甚だ深し」といっている。華嚴宗の碩学であつた高弁が選択集をみて悲憤慷慨したのも無理でない。しかし高弁が一読して直ちに論難した程、選択集の刊行は当時に大きな波瀾を起した。更にそれから十五年後の嘉禄三年には選択集の版木が比叡山で焼却されるという事件が起つた。これこそ焚書の暴挙であつたのであるが、生涯を通して念仏無間を叫び続けていた日蓮からみれば、これこそ仏恩を報ずる快挙ということになる。即ち日蓮は念仏無間地獄抄の中で

「後堀阿院の御宇嘉禄三年、京都六個所の本所より法然房が選択集並に印版を責め出して大講堂の庭に取り上げて三千の大衆会合し三世の仏恩を報じ奉るなりとて、之れを焼失せしめ」といっている。しかしこれほどの日蓮といえども念仏信仰が巷間にみちみち、庶民の心に深く根を下し、いきた信仰となつていた実状については率直に認めないわけにゆかなかつた。即ち日蓮は「上国王より下士民に至るまで、みな経は浄土三部経より外に経はなく、仏は弥陀三尊の外に仏なしといえり」といって、当時の念仏弘通を認めている。この一句は選択集が刊行されてから四十八年しか経っていない文応元年に著わし、北条時頼に上書した立正安国論の一節である。しかし年代からみるとこの文応元年よりも十八年前の寛元年には、北条経時が鎌倉光明寺を創建し、三祖良忠上人が開山となつて法筵を張つていたのである。こうして鎌倉はこの念仏道場を中心として、念仏信仰が盛んであつたから、まことに、日蓮は念仏信者によって囲まれていたわけである。

法話

大師法然上人を慕いて



やま だ かず お
山 田 和 雄

(諏訪市
貞松院・教念寺住職)

一

よれよれの改良服に色あせた威儀細をかけて私は毎朝
勤行をする。ひとりでボクボク木魚をたたいて読経念仏
する。三部経も任意で、好きなところで切り上げる。早
春の冷え冷えする本堂でひとり誦経念仏していると、色
々のよしなしごとが脳味噌をかすめて消えてゆく。こん
な散乱の心でよいのかと思う時、明遍僧都が「念仏は申
候へども心の散るをばいかがい候べき」と問うたのに、
上人の「それは源空もちからをよび候はず——散れども
名を称すれば仏の願力に乗じて往生すべしとこそ意えて

候へ、ただ詮するところ、おほらかに念仏を申候が第一
の事にて候也」と答えられたというくだりを思い出した
りして、ああそうであったかと自得して、またボクボク
を相統する。

二

法然上人は、どうしてこう話のわかるお方なのだろう
か。簡明直截にして肝要をもらさず、奥義を教えるのに
あたかも空気を人に吸わしむるが如く、導くには魚を水
中に住ましむるが如くに、法爾にして自然なるさまは、
まさに現代教育の亀鑑木鐸として仰ぐべきものがある。

日本の隨筆文学史上の白眉とされる吉田兼好がその徒然草三十九段に、いちいち事例を挙げては、「いとたふとし」「これもたふとし」「これも又とふとし」とたたみ掛けて絶賛しているのもむべなるかなである。

私は長髪族である。昔は長髪は厳しく取締まれたもののようで、終戦直後まで鎌倉の光明寺様でも十夜の警固衆に長髪長髯の登嶺は法度のものであったことを覚えていた。私の長髪といつても、てっぺんは「陽のあたる枯野」の風情を呈してきているのだが、しかし、髪をのばし始めの頃は真面目に考えあぐんだものである。信州諏訪の寒中は冷える。気温零下二十度近くになる夜もある。風邪に弱い私はたいてい二月に大風邪をひく。二十年も前にこじらせて肺炎をやって苦しんだことがある。その時病床で、親がつけてくれた自然の髪をなぜ刈らねばならないのかと反発したりしてみた。とにかく厳冬の寒気には、そうでなくとも血の気の薄い私の頭は持たないのである。どうしようと思っている時、その答は上人の御法語にあった。「かみつけながらをとこをんなの死に候はいかに」、答えて「かみにより候はず、ただ念仏と見えたり」と。私の長髪はおかげで名分がたち、頭

だけは寒にはおびえることもなくなった。

これに似た上人の御法語に次のようなのがあった。それは、魚鳥を食う食わぬによつて往生が決定するものかとの問であるが、上人は「魚を食ふもの往生せんには鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには猿ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず、ただ念仏するもの往生はするとぞ源空はしりたる」と、鵜や猿を例に引いて簡単に片付けていられる。すばらしい機知だ。愚問を發した人はあとになって、自分の顔に鵜や猿の顔を取り替えて想像してみても苦笑したことであろう。さすがに戒法の大師、従来守ることにのみ重点がおかれてきた戒に対して、内容と目的から戒を再確認された上人の独自の戒観、百八十度のコペルニクスの転回がここにある。そしてまた積尊の毒矢の喩の説法に似通うような切れ味のよさが示されている。すなわち、毒矢のみ詮索していたら射られた人は死んでしまう。同様に目標にはずれている戒のみ論じていても埒があかない。往生とは戒によるのではないのだ、念仏為先なのだと問題の本質を取り違えることの誤りを指摘していられるのである。また、酒や魚鳥を飲食することについて「まことは飲むべくもな

けれども、この世のならひ」とあっさり答えられ、道程と現実のギャップをみごと鮮やかに処理して、むしろ問者に答を任せるあたり心憎きほどの巧みさである。いたいこの質問は質問者の方に最初から答は出ていたはずである。つまり質問者に酒についての罪の意識があるからこその質問になったので、自分でそれを知りながら質問することは遊戯ならともかく信仰の場の質問ではない。『自分の心に聞きなさい』と逆に厳しい戒めをこめて投げ返されたのであろう。

教育の内容もさることながら、その方法論は更にむずかしい。釈尊に応病与藥、対機說法ということがいわれ、弥勒菩薩に五十億七千万年、法藏菩薩に五劫の思惟のあるも実はその困難さを言い表わしたものであろう。法然上人のその教導ぶり、まさに今日の教育者、襟を正し瞠目して見るべきである。

三

こういう御師匠を得た当時の弟子方は何と幸せなことであつたか。二祖上人は「我が大師釈尊は、ただ法然上人なり」と言われている。もちろんその他の弟子方も同

じ思いでこの師を仰いだことであらう。また、今日では異流の祖とされる親鸞上人が法然上人を「よき人」として仰がれたこともやはり同じ心によるものであろう。この偉大なる師の平生は、御伝の伝えるところでは、「およそ上人の一期の威儀は馬車輿などにのり給はず、金剛草履にて歩行し給ひき」ということである。今日、どの御木像、御絵像も墨染に鼠色の五条袈裟でいられるのはそれを伝えたものか。師として仰ぐに、これほど聖らかな美しい姿がどこにあろう。そして今、このお姿を仰ぎしのぶとき、忘れることのできないのはこの大師法然上人の御遺言である。御伝はそれを次のように伝えている。

上人臨終のとき遺言のむねあり。孝養のために精舎建立のいとなみをなすことなかれ。心ざしあらば、おのおの群集せず、念仏して恩を報すべし。もし群集あれば鬭諍の因縁なりとの給へり

と、何という厳肅な遺戒か。私はこの伝記を朗読するたびに、釈尊の入涅槃を思い起すのである。中夜寂然として声無きとき、入滅寸前の釈尊は比丘達を前になおも諄々と法を説かれたのである。

汝等比丘、寂靜無為の安樂を求めんと欲せば当に憤^け

闇くら（心の乱れ騒ぎ）を離れて独処に閑居すべし——是の故に當に己衆他衆を捨てて空間に独処して滅苦の本を思ふべし。若し衆を衆もろふ者は則ち衆悩を受く

と、この遺教の精神は、今拝読した上人の御遺戒にそのまま写瓶相承されているのである。すなわち群集せざる念仏、場所は何処かといえ、それは「海人漁人がとまやまでもみなこれ」念仏者の独処閑居静処なのである。

独処閑居、本物をつかむためには、本来の意味で「ひとり」にならなければだめである。西行や宗祇や芭蕉の漂泊もこの絶対の一刹那を味到するためのものではなかったか。遠く釈尊は菩提樹下に独坐せられた。わが大師上人は「をしふるに人もなく示すに輩もなき」孤独をかみしめて経蔵に入り「手づからみずから」善導様の「願彼仏願故」の文に巡り合われたのである。どなたにも皆ひとりでである。私は思う。真の教育は、真に人をひとりにすることから始めるべきだと、――。

そもそも、群集せずひとり静かに唱える念仏、「おほらかな念仏」とはこのことを指すのか。上人はその声にまで細心の注意を与えて「わが年にきこゆるほどを高声念仏とするなり。但し機嫌をしらず、高声すべきにはあ

らず。地鉢はこゑにいださんとおもふべきなり」と仰せられた。この機嫌に対する配慮は、また上人が教阿弥陀仏（天野の四郎）に訓されたかざる心なくまことの心にて申す念仏、「仏よりほかはたれかこれをするべき」念仏の心ということになるのではないか。そういう上人の素の御教導の現われか、不思議に上人の門下に独処閑居のひとり念仏者が多い。面受の弟子の中でも、心寂、信寂、宗源、遊蓮、源智、禅勝房、空阿、念阿等ひとしく政治家にも学者にもならず、ただ一向に黙々としてひとりで念仏している。その御師匠法然上人その人も、一切を放下し愚痴十惡の凡夫になりきって——阿弥陀仏と申すばかりをつとめて浄土の莊嚴見るぞうれしき——という境地を確立、他力の法悦を味得せられたのである。

四

ボクボクやりながら雑念を捨てない私の寺の庭も、遅く訪れた春が爛漫。今年は梅雨が早いと聞く。梅雨が明けると連峰に夏雲を見、院裏に蟬の声を聞くようになる。弥陀仏と心は雨にうつせみの

もぬけはてたる声ぞすずしき（法然上人）

昭和三十三年のころ

現在のように電車の便はよくなかった。本数も多くな
く、限られていた。車内は慰安旅行の人で混み合い、倒
れないように両足を踏ん張ると膚が汗ばんだ。

私は熱海駅で降りると、伊東行きに乗り換えた。

熱海駅では、人々が小さな車輛を目掛けて流れ込ん
だ。私は一息つく暇もなく、わずかに車窓から入って
くる風にほてったほほを冷やした。

伊東駅に着くと、ホームの端に立って降り立った人
ちをやり過ごし、改札口へ向かった。

駅を出ると旅館名の入った旗ざおの間をくぐりぬけ、
土産物店が両側に並んだ細い道を私は歩いていった。

尾崎士郎氏を初めてお訪ねした昭和二十四年である。

山^{やま}田^だ静^{しず}郎^{ろう}

(東京出版センター社長)

当時、私は文芸雑誌『新小説』を編集していたので、
原稿依頼のためであった。

お住まいは、音無川に行き着く手前の大きな農家の離
れだった。

筒井敏雄さんは「文学碑献花祭」という随筆で、次の
ように書いておられる。

尾崎士郎が伊豆の伊東へ住んだのは、戦中戦後へ
かけての十年間ぐらいだった。

初手には疎開の仮住居のつもりが、やがて風景と人
情を愛して腰を落ち着けたのが真相であろう。

……(中略)……

そして伊東の文字碑だが、これは、最初の居住地



跡と、二度目の岡崎畔向日荘の前庭の二カ所に建碑され、そぞろ偉大な文人の余情をとどめて温かい。

しかし最初の居住地跡は、現在では、かつての音無河畔のすすきの花道の奥にあった仮住居はあとかたもなく、いつの間にか明るい十字路のロータリーと変わり、なんとなくまぶしい。……(後略)……

昭和五十一年四月二十七日、伊東で催された「尾崎士郎文学碑献花祭」に出席されたときのものである。

筒井さんの文章から推して私がお伺いしたのは岡崎畔向日荘であった。

尾崎士郎氏は、伊東へ移り住まわりたいきさつを「音無河畔より」の冒頭で述べておられた。

此処へ落ちついてから四、五年になるように思う。正確に数えたわけではないがそのくらいになるようである。戦争中の疎開が動機になったのではなく、その前から子供の喘息がひどいので転地の必要をかんじているとき偶々この土地にいた知人がこの借家を見つけてくれ、それがキツカケで引越することにたっただけの話である。……(後略)……

私は初めてなので、表札を確かめてからくぐり戸を開

けた。庭を通って離れの玄関へ進もうとすると、どこからともなく大きな犬が飛んできた。私は慌てて、元の道へ引き返した。幸い通りがかった農家の主人であろうか、かっぶくの良い老人が笑いながら、犬を押えてくれたのでおそるおそる玄関へ向かった。

尾崎士郎氏はご在宅であった。私は、なんとなく近寄りがたい人と思い込んでいた。小説や随筆から、そのような心象を抱いていた。だが、お目にかかるのと、じっと私を見つめられたまなざしの奥にほのぼのとした暖かさを覚えた。張りつめていた気持がほぐれて、用件をすらすらと口にすることができた。尾崎士郎氏は私の用事を聞き終わると、

「あの秋田犬は横綱級の血統だね」

といった。犬のほえる声を耳にして、書斎の窓から私が庭から入るのを見ておられたようであった。

翌年、犬に子どもができて、一匹やろう、といいだされて下宿をしていた私は戸惑った。

下宿では犬を飼えない、という理由でご辞退したような記憶がある。

その後、尾崎士郎氏は東京大森山王へ移ってこられ

た。そして亡くなられる昭和三十九年まで私はお交き合
いをさせていただいた。

数えれば、十五、六年の歳月であった。

私の二十代後半から三十代である。

昨日の日曜日、書棚を整理しているとたまたま「飄々
録」が目にとまった。昭和三十九年二月十九日に尾崎士
郎氏は逝去されたが、翌年追悼集として上梓されたもの
である。ひもといっているうちに、断続的ではあるが先に
書いたような状況を脳裏に描いた。次のような私の文章
に触れたからといった方が、正しいかも知れない。

私の三十代は起伏の多い人生であった。しかしこれ
は私だけのものではない。人生には十代は十代の悩
みがあり、二十代は二十代の不安がある。だが、三
十代という年代は、私を幾度となく人生の岐路に追
いやった。それは出版という事業のための失敗から
くる焦躁であり、生活の危機であった。人間には自
分の進む方向を見失ったときの処理しきれない孤独
感はある自分自身でじっと耐えているより他に方法のな
いことを悟った時機でもあった。……(後略)……

そのころであった。あるとき尾崎士郎氏が私の顔を見

て、

「もう一度、出版をやってみるつもりはないか」

といった。しかし、再び私は出版を経営していく自信
をもつことができなかった。だが、はっきり言葉に出し
て自分の気持ちを言わなかったことが、尾崎士郎氏に引き
合わせていただいたU氏と気まづくなる結果を招いた。

尾崎士郎氏は言葉を残した。

「事務所はMが会長をしている会社の一部屋を空けられ
るといつていたから、そこを借りられるように会ったと
きぼくから話そう。Mはそんな男じゃないが、ただじゃ
君も居づらいたろうからぼくが家賃として毎月三千円出
すから遠慮することはない。社長のK君にも断わらな
くはいけなから手紙を出しておくよ」

それから一週間ほどたって、尾崎士郎氏に連れられて
出版社の資金を出すというU氏と銀座の料理屋で会うこ
とになった。それまでU氏に三、四度会っており顔見知
りであるが、今度のような用件では初めてだった。一代
で会社を築いたU氏は六十歳をはるかに越しており、小
柄ではあるが経が全身に行き届いたような人であっ
た。

「先生が推薦される人でしたら、私も出来るだけのことはしましょう」

とU氏は上きげんであった。

そばで私は酒が舌の上をつかえるようにざらざらと流れていく経験を、初めて味わっていた。頭の中では、出版という事業で再び失敗した場合のことが離れない。そうなれば、尾崎士郎氏の顔にどろを塗りかねない。やり場のない気持が先に立った。

だが、三日後U氏の会社を私は訪れた。エレベーターを避けて階段を上りながら、どのように切り出せばいいのか私は言葉を探していた。約束の午前十時から一時間ばかり待たされてU氏にお会いしたとき、考えていた言葉より先に、

「お金は要りません。ぼくは出版社を経営していく自信もありませんから」

といった。いってしまっただけだと思ったが、そのときU氏の顔が一瞬引き締まった。

国電の大森駅から山王の尾崎邸へ足を運びながら、重い気持をもてあました。U氏と会ってから十日ばかり過ぎて、尾崎士郎氏の電報を受け取ったからである。

尾崎邸に着き玄関へ立つと、出て来られた奥さんは、いつもと変わらない表情で、

「主人がお待ちしていました」

といった。私が奥の書斎へ入ると、尾崎士郎氏は待っていたように、

「君はあれからどうして来ないのかね」

といったが、押えた声が私に腹立たしさを伝えた。私が言葉に窮していると、尾崎士郎氏は言葉を和らげた。

「君がU氏とけんかしたうわさは聞いている。しかしぼくが怒っているのはそういうことじゃない。ぼくが紹介した人物と君がけんかしようといひんだ。君がけんかするには理由があったとしか思えない。しかしそれはそれでよいではないか。ただそんなことでぼくと君との人間関係には何の変化もおきないということをいいたいんだよ」

私の全身に、汗が吹き出したようであった。下着が体にまっわりついた。目頭が熱くなると、尾崎士郎氏の顔がかすんで見えなくなってしまう。

昭和三十三年ごろのことだった。思い出が私の心を去来した。

〈隨想〉

ほとけとの出会い (二)

佐々木 竹隆 三

(大正大学教授・医博)



癌研付属病院入院後の一週間は毎日検査の連続で、何も考えることもなく、格別の不安もなく過ぎました。胃の痛みも少しづつ和らぐようで、主治医や看護婦の指示に従ってひたすらに療養すればよいのですから、気楽なものでした。

朝は絶食、正午ちかくまで検査を受け、病室に帰って朝・昼食の二食分の食事を取り、午後は安静に横臥する——という単調な生活で、退屈すればテレビを見たり、FM放送の音楽を聴いたり、時には読書をするといったのんびりした優雅な生活でした。ガストロファイバースコープ(いわゆる胃カメラ)検査の時の苦痛やレントゲン撮影時のバリウムを飲

む不快感など——一時的な肉体的苦痛は精神不安や緊張を伴った苦悩に比べれば、軽いものです。

入院十日目頃、主治医から検査結果についての説明があり、多発性の典型的ストレス潰瘍の診断を受けました。わたしの精神状態はきわめて冷静でした。ただ、潰瘍の発性部位が噴門部後壁で食道のすぐ下であること(将来この同じ部位に潰瘍が再発するか、いわゆる難治性潰瘍で手術をしなければならないという場合には、胃全摘出ということは避けられない)が唯一の気がかりでしたけれども……。

もっとも恐れていた「胃癌」ではなかったという安心感からか、翌日から食欲も出てきて、症状も目

に見えて軽くなり、平穩無事の日が続きました。そのまま順調に治癒への方向に進めば問題はなく、めでたしめでたしということとなったでしょうけれども、そして反面、「ほとけとの出会い」ということもわたくしには起らなかったでしょう。

人生とはまことに不思議なものです。わたくしたちが考えている以上に起伏に富んでいるもののようにあります。

わたくしの病室は定員十二名のいわゆる大部屋で、そのほとんどが「胃潰瘍」か「急性肝炎」の患者でした。最初のうちは自分の病気のことと頭が一つばいで他人のことなど気にかかるゆとりがありませんでしたが、「胃癌の恐怖」から解放された安全圏のなかで、次第に周囲に対する関心が高まってきました。

わたくしの右隣りのベッドの三十代の若い人も同じように「胃潰瘍」の診断でしたが、最初から点滴や注射の回数が多く、わたくしよりはよほど重症のようでした。彼は婦人靴専門店の社長で、典型的な江戸っ子気質であり、彼との会話のなかからわたくし

しとは全く別な生き方について、学ぶべき多くのことがありました。

何かの話の関連で、ある時、「飲む・打つ・買う」の男性における三つの条件について話し合った時、残念だけどわたくしは三つとも失格であると正直にうち明けましたが、とても信じられないという顔付きで、「それでは、何が楽しみでお前は生きているのか」と反問され、返答に窮したことは今でも記憶に鮮明です。

彼は胃癌——しかも肝臓に転移があり、手術不能ということがあとで判明したわけですが、快活で楽天的で歯切れのいい話しぶりにもかかわらず次第に症状が悪化し、間もなく個室へ転室してゆきました。そして二、三日後に死亡という悲報がわれわれの病室にもれてきました。

突然の彼の死は、わたくしたちの病室の空気を振憾させましたが、わたくし自身にも大きなショックを与えました。「胃潰瘍」という診断名は、患者を絶望させないための止むを得ざる方便ではないか——という恐ろしい懷疑と不安からのがれるすべの

ない観念地獄に突如としてつき落されてしまったのです。

不安と懐疑の眼で改めて病室を見まわした時、わたくしは明らかに「癌特有の顔貌」を周囲に見出し、わたくしは心の中でぶざまにうろたえ、あわてふためき、何かにすがりつきたいという気持でいっぱいでした。

向い側の窓側のベッドの六十過ぎの老人は、入院生活が長く、同室の患者達から親方という愛称で呼ばれている人でしたが、付添いの貞淑な奥さんを事毎に何が気に入らぬのか声を荒げて叱りつけるワマンでした。しかし、威勢のいい言葉とはうらはらに、彼の顔色でどす黒く、一目で「癌顔貌」そのもののようです。ある日、廊下でこの老人の奥さんから呼びとめられ、「先生（わたくしが入院時同室の患者達に挨拶をかねて渡した小さな菓子折に添えた名刺から、医者であるという身分が知れ、かつ医学博士という肩書きに對し尊敬の念をこめて、当時わたくしは先生と呼ばれていました）、うちの主人をどう思いますか。癌でもう助からないのだそうです。先生から、毎朝今日は顔

色がよいね、元気になりましたね——と呼びかけられるのが、どんなにうれしか、いつも有難いことだと感謝しております。主人は何も本当のことは知りません。治るつもりでいるので。先生は何もかもわかっていて、主人を励ます意味でああ言って下さっているのですね」と御礼をいわれた時、わたくしは微笑をもって目礼を返しましたが、心のなかでは早鐘をうつようでした。

不幸にも私の直観は適中しており、彼はまぎれもなくもはや手おくれとなった胃癌患者であったのです。わたくしは次第に抑うつ的となり、際限のない不安と懐疑の淵へ加速度的に落下してゆきました。それ以来極端な食思不進に陥り、「わたくしも本々は胃癌であり、もう助からないのかも知れない。主治医はわたくしが医者であるために、ことさらに慎重に気をつかい、しかも良性の潰瘍であると言いき、点滴の必要すらないほどの軽症なのだと言いくるめているのではないか——という疑いが打消し難く出沒し、他方では「主治医に對する信頼を失ってはいけない。もっとすなおになることだ。ストレ

ス潰瘍だから必ず治療するのだ。お前は精神医ではないか。癌ノイローゼみたいな考えにとりつかれるほどにお前は愚かであったのか——という別の声のささやきとが交錯し、次第に冷静さを失っていったようです。

患者の必理とは、このように不安定でささいな事にまで神経がビリビリし、一喜一憂を繰返すものであります。胃潰瘍であれと願う気持と胃癌かも知れないという不安——このアンビヴァレンツは、日夜繰返しわたくしの脳裡に襲来し、わたくしを苦しめました。同時に、軽快の方向に進んでいた症状も悪化し、主治医も頭をかしげる仕末です。

今から考えるとまことにお恥しいことですが、疑必暗鬼となった当時のわたくしの心境は、まごうことなく完全な「癌ノイローゼ」の状態であったと思います。

わたくしは医者でありますので、他の職業の方に比較すると、他人の死に接する機会がこれまでも多かったし、また死にゆく人の姿を観察する機会にも多く遭遇し、少くとも死の問題を考察するチャンス

に恵まれており、自分で生死についての心構えがある程度できており、自らの死に臨んでもそれほど見苦しい態度をとらないだろうとひそかに自負しておりましたが、同室の患者達が胃潰瘍という病名であるにもかかわらず、実際には胃癌であり、事実として次々と死んでゆくさまをつぶさに観察するという状況のなかでは、日頃の医師としての訓練や心構えも教養も、もはや何の役にも立たないことを知った時、わたくしはおのれの愚かさと至らなさを今更のように痛感しました。

同室の患者達が全部胃癌であっても自分だけはまだに胃潰瘍であって欲しい、結局は自分だけでも助かりたいという自己中心的な身勝手な願望——に気づいた時、わたくしは慄然とすると同時に、自己嫌悪と罪の意識にさいなまれ、絶望的な状況に陥りました。

増谷文雄先生著『仏教概論』（現代人の仏教）第十二巻——この一冊の本がわたくしに救いを齎し、「ほとけとの出会い」の契機となった訳であります。が、詳細は次号にゆずります。

（つづく）

■六時礼讃の「無常偈」に生きる■

—日没無常偈(下)—

—三—

安^{やす}居^い香^{こう}山^{ざん}

(大正大学教授・文博)

○

「日没無常偈」の前の句において、私達はいやという程に、人生の無常な現実を、善導大師から指摘されました。われわれには分り切っている現実の違いありませんが、こうして改めて指摘されてみると、厳しい現実の前に立たされている私の姿に、おののかざるをえません。

善導大師の時代には、こうした無常思想が、広く流布していたようです。そして、未来に希望を托そうとする弥勒^{みろく}信仰などが、大いに流行していたときでした。当時

は、六時礼讃に掲げられているような「無常偈」が、丁度、流行歌がはやり、多くの人びとによって歌われるように、流行していたと言われています。

善導大師の「無常偈」も、そうした時代の潮流に乗ったものと思われませんが、実践的活動家であった大師は、積極的これを取りあげ、「行^{ぎょう}」を中心とした『往生礼讃』にこれを組み入れ、人びとにその自覚と反省を、強く求められたものと思われまます。

ところでこの「日没無常偈」では、単にそうした無事な人生を指摘するに止めず、それ故にこそどうあるべき

かということ、強い口調で説かれています。後の二句がまさにそれに当るものです。もう一度、念のためこれを掲げてみましょう。

各々聞け 強健有力の時

自策自勵して 常住を求めよ

私は、この最後の二句が、この上なく好きです。特に最後の「自策自勵求常住」という語句が好きで、私の座右の銘とすると共に、人に一筆頼まれたりしますと、この語句を書きしるします。

それにしても、この二句のなんと強い語調であることでしょうか。

「おまえ達、よく聞け」

この一句は、大師が咽喉もはりさけんばかり叫ばれた一句ではないでしょうか。大師は毎日、終南山の寺から長安の町にでかけ、辻説法をしておられたようです。長安の寺にも住んでおられたようですので、集ってくる信者たちに、このように呼びかけておられたに違いありません。

善導大師のご性格が、どのようなであったかは、詳しい伝記が伝わっていませんので、何とも育えませんが、私

の想像するところでは、相当に意志の強い、積極的な人であったと思われます。大師は数万巻もの阿弥陀經書写をなさったと伝記は伝えています。事実がどうであったかは別として、こうした伝記が記述されるということ、大師の強固な意志と、その実践力を、よく示していると言えます。

こうした大師が、声高に、「おまえたち聞け」と怒鳴られている姿を、私なりにまのあたりに見る気がしてなりません。そして、更にこれに続いて、

「強健が力ある内に頑張るのだ」

と、「強健有力時」と説かれていることに、深い感動に打たれずにはいられません。

われわれは、ともすると、健康でビチビチとして、日常多忙に走り廻っている時は、私自身が置かれている運命に盲目となり勝ちであります。若い時、或いは健康な時、生死の問題を考える余裕もなければ、そうしたことを語ることさえ馬鹿々々しいと思うことしばしばです。しかし、生死そのことは、老若男女、いつでもそこにあることを、忘れ去っているわけです。

それ故にこそ、善導大師は、そうした健康な時こそ、

その事実を自覚し、努力すべきことを、説いておられるのです。今日か明日か分らぬ死の淵に、病いで弱った身体を迷わせている時では、最早や遅いというわけなのではありません。また、そんな時では、何事かを考える力も、行う能力もありません。そして、そこできかに自覚してみても、時すでに遅いということになります。

仏教の教えるところは、それが人生の行路の中で生かされてこそ、その意味もあることでありましょう。日々の生活の中に、その教えが有意義に生かされ、その日の営みが、よりよいものになってこそ、その教えが、本当に生きたものとなったと言えるのでありましょう。その為には、今ここで、人生の無事が自覚され、反省され、そして、永遠に生かされる生命の灯が、求められねばなりません。

そうしたことを、この最後の一句は教えています。しかしそれは、たなぼた式に、待っていて支えられるものではありません。自らの努力によって、勝ち取らねばなりません。「自策自勵」、即ち、自分に鞭打ち、ともすると墮落し、或いは途中で挫折せんとする自己を励まして、この不滅の道を発見し、わがものとなねばなりません。

ん。

一体、ここで言われている「常住」なものとは、何なのでありましょうか。無常なこの人生における「常住」なものとは、何を指すのでありましょうか。

浄土の教えの究極からいえますと、常住不滅な極楽世界そのものを指すものと思われませんが、そうした世界そのものが、日常の生活に求められるとするならば、私は、無常な人生において、びくともしない不動心そのものであろうかと思えます。そして、そうした不動心は、無常な人生の自覚において、始めて獲得されうるものと、思う次第です。前にも申しましたが、釈尊は、無常な人生の事実性を、確と自覚し、「生者必滅」の現実を知り、それを超克することを教えられたと説きました。

こうした事実への自覚は、決して口でいう程にたやすいことではありませんが、この事実が本当に自覚されるときは、無常に対するいかなる迷いからも脱脚できるのではないのでしょうか。そして、そうした不動心が確立したとき、常住の世界は、そこにあるのではないのでしょうか。

大師はこうしたものへの道を、念仏の教えによって発

見され、又それを実践せられたのでありましょうが、ここでは、そこまで具体的には述べておられません。そして、ただ「自策自勵して、常住の道を求めなさい」とだけきとしておられますが、私はこの二句の教えに、深い感銘を覚えると共に、大師の「無常偈」に生きる指標を、ここに見いだす次第です。

とは言っても、再々申しておりますように、この道は決して言うほどにたやすいものではありません。そして、私自身、理窟ではそのように理解していても、仲々にこれを実践することなどできません。凡夫のあざましさを、今更のように感ずる次第です。

最近よく、病氣の宣告を受けた人びとが、自己の生命の限界を知りつつ、強く生きていかれた話を見たり、聞いたりいたします。一種の死刑宣告者であります。こうした人の精神力の強さに、心打たれます。『週刊朝日』（三月三十日号）に紹介された原崎百子さんの場合もその一人でした。そして、原崎さんは、クリスチャンとして、その信仰に生き、そして死なれた人であると報じられています。その日記である『わが涙よ、わが歌となれ』という本がでているそうですので、一度拝読したいと思つて

います。

しかし考えてみると、何も原崎さんに限らず、私達は己に生れた時に、死が宣告されているわけであります。ただ原崎さんと違うところは、その何時であるか、全く不明であるということであります。しかも或いはそれは明日であるのかも知れません。正に、「風中の灯」なのであります。他山の石とすべきことと、切に思うところです。

毎日、夢中になって働いている私など、時にこうした人びとの記録を見ると、ハッと「われ」に返ることがあります。そして、「そうだ、私もこうしてはいられない。先は短いのだ」と、ついあせり勝ちであります。それでも善導大師の教えではありませんが、「まだ、大丈夫だ。これからでも間に合うのだ」と、駄馬に鞭打つ次第です。

どうか皆様も、この大師の教えをみ心として、生きて下さい。私もまた、大いに負けずに頑張りたいと思います。

(つづく)

■善導大師の生涯とその教え■

— 七 —

◇ ◇ 伝道教化 ◇ ◇

○
善導大師は、道綽禪師のもとを去ってから終南山に入られますが、長い修行の結果獲得されました浄土の信仰を伝えるために、ほど近い長安の都へ、しばしば出てこられました。

「近ごろは山僧善導なるものあり。……すでに京師に入りて広くこの化を行じ、弥陀経を写すこと数万卷、士女奉ずる者その数無量なり。ときに光明寺に在って説法す」

と『統高僧伝』には述べられていますが、その「山僧」

の山とは終南山を指しており、善導大師はその地を中心に住んでおられました。求道の旅を終えられてこの終南山に入られたことは、種々の伝記に記されておられ、大師は、ここで数年間厳しい修行に励まれ、三昧発得されたのであります。『新修伝』にはこの終南山の悟真寺におられたと記されておりますが、悟真寺は、隋のとき浄業が終南山の藍田に創建されたものであります。唐代に廢滅したこの寺を法誠が貞観年中に復興したといわれます。そのことは『統高僧伝』にも見えています。法誠は貞観十四年（六四〇）に七十八歳で亡くなられておりますから、善導大師がこのお寺へ住まわれたのは、その後のことでありましょう。

ともあれ、善導大師は、伝道教化のためにしばしば北

方五十数里の長安の都へ出向かわれたのであります。當時の中国は、唐の時代で天下統一ができ上がり、二代太宗とつぎの高宗の兩帝が、唐の国の黄金時代をつくりだすとともに、仏教に帰依して厚く保護されました。そのため名僧学者が輩出し、都である長安に集って、仏教經典の翻訳事業も盛んにおこなわれ、その数は六千巻にも達したといわれます。その長安の都には、有名なお寺も沢山ありました。先にでてまいりました「光明寺」について説法す」といわれる光明寺は、当時三階教の祖である隋の信行禪師の門下の慧了が住んでいました。かれは顯慶元年（六五七）に歿していますが、それは大師が四十五歳のときであります。大師が光明寺で説法されたのは、慧了の晩年であります。大師は三階教に抵抗して、淨土念仏の信仰を説かれたのでしょう。もちろん、大師は光明寺ばかりでなく、ほかの寺院でも多に説法されたといわれますし、のみならず、街頭においても念仏信仰を説かれました。その感化力の偉大で、『阿弥陀經』を誦すると十乃至三十万遍、阿弥陀仏を念ずること日に一万五千乃至十万遍のこともあったといわれています。



善導大師の説法の感化力の偉大さをものがたるこんなエピソードが伝えられています。

長安の都に屠兒宝藏という肉を売る商人がおりました。聖者といわれる善導大師が、都へ来られて伝道説法すると、その教えに傾倒するもの多く、念仏の信仰が広まり、念仏の声は洋々としてみなぎり渡り、人々は肉食を断って仏道に精進するようになりました。そのため商売は次第にさびれ閉店のやむない破目に陥ってしまいました。かれは、そこで非常に大師をうらみ、慫慂の念は念仏の盛んになる様子と反比例して増していったのであります。ついに、かれは意を決して大師を殺害しようと一刀をかくして、大師の部屋に忍びこんだのです。ところが、大師は、従容として念仏を唱えながら、静かに、かれに西方を指し示されたといわれます。すると、たちまちそこには、極楽淨土の莊嚴のすがたが現われたのであります。眼のあたりに、その光景をみた宝藏は、大師の前に身を投じ、数々の罪業をわびるとともに、懺悔の

念つよく、念仏行者となったということでもあります。

『瑞応伝』には、「弥陀経を写すこと十万巻、浄土の変相を画くこと三百鋪、所見の塔廟修葺せざるることなし」として、伝えていますが、念仏称名三昧の生活とともに、写経に専念された大師のお姿を偲ぶこともできるのであります。

「出でては即ち人のために浄土の法を説きて諸の道俗を化し、道心を発さしめて浄土の行を修せしむ。暫時も利益を為さざることなし」

とも、『新修伝』には記されていますが、大師こそは、まさに不惜身命の菩薩行を実践されて、生きとし生ける人々を化導された念仏行者であり、偉大な伝道者であられました。

その当時の宗教界は、かならずしも仏教のみが独占していたわけではありません。仏教以外の宗教としては、中国在来の道教があり、外来宗教として、ペルシャのゾロアスター教の流れの祇教、キリスト教一派の景教、ペル

シャ人のマニの開いた摩尼教、マホメットの回教などがあり、さながら、文化の都長安は、世界宗教の博覧会の観も呈しておりました。

さらに、仏教のなかでも、念仏に対して異見をとねえる学派もありました。たとえば撰論学派などは、「弥陀の浄土は報身報土であるところから、かならずしも凡夫が近づけるところではなく、凡夫が十念をとねえて極楽に往生できるとしているのは別の意味で、念仏が直ちに往生の正因となるのではない」と反駁したのでした。

それに対して、善導大師は、「観経に基いている念仏信仰は、頓教一乗海であって、罪惡の凡夫こそ正機であり、救済の対象であること、しかも、易行最勝の法門であること」を諄々と説き示されて、異教徒たちに対しては論陣をはられ浄土の法門を広められたのであります。

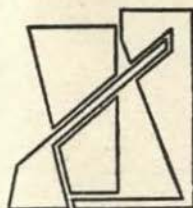
「願わくは諸の衆生と共に、安樂國に往生せん」

大師のこの「共生極楽」の言葉は、すべての人々が念仏法門の利益にあずかって、真実の人間の生きる喜びを感得する叫びでもありましょう。

(宮林昭彦)

法然上人の弟子たち ⑩

津戸三郎為守のこと [六]



梶村昇 かじむら のぼる

(亜細亜大学教授)

建久九年(一一九八)という年は、法然上人の一身にとっても、浄土宗にとっても、また日本の宗教界にとっても、重大なできごとのあった年であった。上人の一身にとっては、三昧発得という稀有の体験があり、続いて没後遺誠を書かれるほどの大病をし、その間に『選択集』を選述され、それが浄土宗の聖典となり、ひいては平安朝八宗の夢を破る結果となったのである。

このころから、専修念仏は世の注目を集めるようになり、同時に、風当たりも除々に強くなってきた。建久九年の翌々年の正治二年(一二〇〇)五月十二日、鎌倉幕府は念仏を禁断し、黒衣をはぎとって焼いている。「見る者堵(かきね)の如し、皆弾指(だんし) (つまはじき・そしる) せざる

なし」と『吾妻鏡』(巻十六)は述べている。これは黒衣をにくんだからだとわざわざ書いてあるところをみると、彼らは専修念仏の徒の処置に窮していたものと思える。というのは、念仏そのものは、まぎれもなく立派な仏教行の一つであり、頼朝でさえ、建久六年五月二十日、政子とともに天王寺に参着して、「御念仏所に入る」(『吾妻鏡』巻十五)とあるくらいであるから、念仏を禁止するということは不可能なことである。これは何も鎌倉だけのことでなく、京都においても、少し後のことになるが、元久二年(一二〇五)、安楽法本房事件が起り、興福寺衆徒が奏状を出して処罰を願ったとき、時の藏人頭藤原長兼は、「其の操行はたとえ不善を為すと雖も、勸

むる所、執る所、只念仏往生の義なり。この事に依つて罪科の行なわる。可痛哭々々々」(『三長記』)と嘆じているのをみても、念仏をしたから罰するということは、どうにもできないことがらであったといえる。といつて、黒衣を着て念仏を称えている専修念仏の徒は、どうも今までの念仏と違うし、しかも、それがますます増えている。これは困ったことだが何とかしなくてはならない。

そこで、彼らの着ている黒衣をにくんで、これをはぎとつて焼いてしまふというような挙にでたのかも知れない。黒衣には何の罪もない。そこで、伊勢称念という念仏者が、「俗之束帯、僧之黒衣、各々同色を為す」どうしてこれを禁ずるのか、とつめより、私の黒衣は焼けるものではない、と言って、自分の黒衣を火の中に投じたところ、火が自然に消えてしまったと書いてある。『吾妻鏡』の筆者も、ヒステリックな幕府の処置に何となく批判的であつたように思われる。

ヒステリックといへば、鎌倉幕府は、頼朝以来、どうもその気があつたようだ。範頼、義経を死に追いこんだことから始り、彼の死んだ(正治元年・一一九五)翌年には梶原景時が殺され、三年後には、一幡、比企能員が殺

され、また、將軍頼家が修善寺に閉され、翌年には殺され、その翌年には、頼家について將軍となつた実朝を殺そうとして時政が失脚、平賀朝雅が殺されている。これがたつた五、六年間の出来事なのであるから驚くべきヒステリックといわなくてはなるまい。猜疑と陰謀の渦巻く世界に心の平安などあつたものではない。熊谷を始め関東の武者たちが多く法然上人に帰依していったことも当然の成り行きであつたような気がする。

世情はこのような有様であつたが、この間にも津戸三郎為守は、ますます念仏に励んでいたように思われる。というのも、彼の記録は、建久九年の上人の病氣見舞以來六年間というものは、何もないのでこう推察するほかはない。そして元久二年(一二〇五)の秋になつて、彼にとっては大変な事件がもちあがつた。まず『九卷伝』はこの事件をこう記している。

征夷大將軍鎌倉の右大臣実朝公の御時、元久二年秋の頃、津戸三郎為守、念仏所を建立し一向専修を興行して、余行をなんどせざるよし將軍家に議して申族あるに付て、御尋あるへき由内々其きこえ有しかは、かかる事にこそあひ候はんすれ、召尋ねら

る時、申上へき次第を難答の言を調べて、仮名真名にしるし給へきよし、飛脚を立て上人に申入けるに付て、十月十八日、御返事に言く

とあり、このあとに法然上人からの消息を長く記している。『四十八巻伝』もほぼ同様であるが、一、二の点で違っている。

津の戸の三郎、上人の門弟浄勝房、唯願房等の僧衆少々申くたして、念仏の先達として、不断念仏をはじめおこなひけるを、為守聖道の諸宗を誘し専修念仏を興するよし元久二年の秋のころ、(以下略)

というのである。事件は恐らく両書を総合したものであったであろう。すなわち、為守は先に推察したように、まずまず念仏に励んで、ついには津戸郷内に念仏所を建立し、その念仏所で念仏の先達となってくれるような人が、関東に下向してくれるよう上人にお願いをした。そこで上人は、門弟の浄勝房、唯願房らを派遣した。この二人がどういう人であったかに分らないが、『翼賛』には、兩人とも善恵上人の弟子か、と書いてある。唯願という人は、隆寛律師の門弟にもいると記しているが、為守は後年、上人の滅後、善恵上人に不審の点を尋ねたり

しているから、この人が善恵上人の弟子であったとみる方が自然かも知れない。

ともかく為守は、念仏所をつくり、京都から専門家(?)をよんで念仏を始めたのである。為守一人が念仏をしているならば問題はなかったであろうが、こうして本格的に念仏を始めたとなると、恐らく津戸郷内の領民たちは、念仏所に通い始めたことであろうし、それは恰も一寺院が建立されたようなものであるから、まず近隣の寺院が黙ってはいないであろう。「為守聖道の諸宗を誘し」たかどうかはわからないが、大勢出入りした領民たちの中には、専修念仏の教えをありがたがるあまりに、諸宗を誘するものが現れたであろうことは想像にたかない。こうして為守は幕府にざん言される結果となつたものと思われる。

ところが、幕府の中には、為守や専修念仏の肩をもつていた人がいたのであろう。早速このことを為守に報告してくれた。近々召し尋ねられる、と。為守は驚いて、もしそういうことがあれば、どのように申し上げたらよいものか。難しい答えや、たとえの仕方などと漢文ではなく、漢字仮名まじり文で詳しく教えて戴きたい、と飛

脚で上人の許に走らせたのである。

以上が事件の概要である。召換のことが前もって為守の耳に入ったりことや漢字仮名まじりで詳しく返事をいただきたいと申し入れたことなど、為守の飾り気のない、そして、人に好かれた様が偲ばれる。

これに対し上人は、「十月十八日付」の手紙を為守に書き送っている。この消息が元久二年十月十八日のものであることは間違いない。

御文くはしくうけ給り候ぬ。念仏の事問はれ候はんには、なしかはくはしき事をは申させ給ふへき。けいもいまたくはしくもならはせ給はぬ事にて候へ、専修雑修の間の事は、くはしき沙汰候はすとも、いかやうなる事こそと召問はれ候はは、汚門のくはしきことしり候はす。御京上の時うけ給はりわたり候て……（引用は元亨版）

と書き始まって、相当長文の消息となっている。しかし消息の要点は、この書き出しの部分にあるのであって、要は、「念仏の事を問われたならば、詳しい事を申し上げるな、事実、まだ詳しいことは習っていないのであるから、専修とか雑修とかのことは詳しく申し上げ

ず、もしその事を問われたならば、法門の詳しいことは存じません。私（為守のこと）が上京した折（建久六年三月二十一日）に上人から承っただけであった」と答えなさい、ということに尽きている。

このあと、消息は、在家のものの後世の助かる道は極楽に往生するよりほかに道のないこと、それには念仏して往生するよりほかはないこと、それは弥陀の本願であるから、法門も知らず、智慧もない最下のもので救われると聞いている。そして、これは唐の善導和尚がすめられたことで、そのことは唐の信仲の書いた「専修浄業文」（これは現在もお不明……筆者注）という文に書いてある、それを浄勝房が持っているから召換されたとき持って行ったらよい。

ということが詳しく記され、つづけて、五種正行の説明があり、善導和尚は弥陀の化身であるから、「よもひか事にては候はじ」と述べ、ともかく詳しいことは存じませんと申すがよいと繰り返して述べている。これ以外に方法はないとしても、今日流に言えば、法然上人の法廷闘争手段は完璧なものであったと感心させられる。とくに最後の所で、

心候はん人はさりとも心え候ひなん。又道心なからん人は、いかに道理百千万わかすとも、よも心え候はし。……さらさらん(雑々)人は、いかに申すとも

も思とも、無益の事にてこそ候はんすれ

とあるが、まさに人生の真理であって、「心なからん人」には百万言をついやして述べてみたところで、所詮甲斐なきことである。

京都でもすでに念仏弾正は始まって、上人はその前年、元久元年十一月山門衆徒の蜂起に対応して、「七箇条起請文」に署名している。私見ではあるが、これは上人の門弟筆頭の信空の画したことで、上人の真意ではなかったと思われる(拙著『法然』角川選書参照)。それというの「心なからん人」に起請をしてみても始まらないからである。それはともかくとして為守は上人からのお手紙を頂戴し、くりかえし拝見して、全文をそらで覚えてしまった。こうして用意万端整えていたところへ、案の定呼び出し状がやってきた。

(つづく)

◇ “浄土句集” 欄投稿要項

六月に入りまして、梅雨入りのうっとうしい毎日
が相変らず続きますが、本誌俳友の皆様はお健やか
にお過ごしのことと思います。

さて、ホトトギス同人の一田牛畝先生(福岡市正定
寺住職)を選者にお迎えして、毎回多くの秀句を掲載
しています。“浄土句集”のコーナーもなかなか好評
のうちに続けられています。

どうか皆様も、お仲間などにお呼びかけいただい
て振るってお投句下さいませ。

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

。〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

。〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛

浄土句集

一田牛畝選

江の島は石段ばかり落椿 東京 栗原とも子
海遙か見えて椿の離れ島 東京 小笠原香梓

大分 丹羽 難中

殿様の倉をうつして春の水

畦焼きしあとの温みを踏んで行く

京都 安藤 寛

評 北原白秋で有名な筑後柳川は、春とも

評 春となった。外にも出たくなつた。畦

なれば川下りで賑やかである。そして藩

焼のすみし上を踏めば、足裏より来る温

主立花公の屋敷の海鼠漆喰の倉をうつし

みは、何んとも言ひ得ぬ感覚にちがいな

ている春水より、陽炎が立ちのぼって

い。

る風景は、白秋もこよなく好きだった

いとさしの舞に若やぐ難の夜

しい。

一とさしの舞に若やぐ難の夜

東京 猪瀬 幸子

福岡 永江 隆説

花の旅母娘いたわりいたわれ

評 白酒を呑んでほろ酔い加減、そんなよ

い気持ちとなれば、ひとさし舞いたくも

なる。舞へば運動になり、健康の薬とも

なり、不求自得の若返ることにもなる。

評 母娘連れ霊場めぐり、花巡りしつつお

互いにいたわり合いつつの旅は、嘸ぞかし

疲労を忘れて楽しいことならん。

駱駝行く菜の花畑入日さす

東京 真野 竜

駱駝行く菜の花畑入日さす

東京 真野 竜

駱駝行く菜の花畑入日さす

東京 真野 竜

駱駝行く菜の花畑入日さす

東京 真野 竜

駱駝行く菜の花畑入日さす

東京 真野 竜

駱駝行く菜の花畑入日さす

東京 真野 竜

福岡 服部 光代
惜しみなく牡丹を剪りてみ仏に

東京 細田 初枝
歴代の尼僧の墓や牡丹の芽

東京 栗原やえ子
物の芽は泣く濡れて土黒し

神奈川 長谷川宣太
クシナガラ今新緑の沙羅双樹

三重 森 静枝
ふる里の浜に來たりて東風に待つ

東京 阪入 等達
陽炎や休耕田に鳥舞へり

山形 松田 允子
母達者彼岸詣での老の杖

愛媛 伊藤 新三
未知の人身かけられし花見かな

東京 田中 秀代
好物の水菜見つけて車止む

群馬 島津 か寿
糸桜肩に触れもし礎登る

埼玉 佐久間愛子
甘夏の出初めし去年の兄おもふ

福岡 国友 星畝
花吹雪文字の消えたる姫の墓

東京 小林桂詩郎
花の山親をさがして子の泣ける

山形 松田 光蒼
忘れし墓標に供華やお彼岸会

福岡 前田 秀峰
十夜婆柱背にして居眠れる

東京 鈴木 葉子
点点と工場の横の犬ふぐり

広島 吉浦 宏栄
咲くものはすべて供華とす春の寺

福岡 新森 耕春
おん祖師の開宗の年我迎ふ

東京 吉原発起子
鄙の里に酌し梅見の味噌おでん

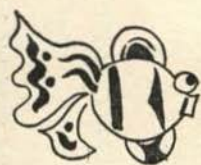
広島 香月てい子
花まつり法縁結ぶ御手の糸

福岡 行正 明弘
桃咲いて寺に産れし女の児

東京 新井 新生
大輪の真紅にもえし落椿

東京 末常てる子
留守に訪ひたりし万両の実の赤く

一田 牛畝
鮎以外雑魚と呼ばれて刺網に



信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(七)

吉村 孝

愚癡の説明がまだ続きます。

教語し開導すれども、これを信ずる者は少なし(法を説いて教えの道に導き入たようとしても、これを信ずる者は少ない)。

生死流転し、休止することあることなし(人は常に変化する世の中に生活するものであって、少しの間も止まることがないものである)。

此の如きの人、瞋冥抵突して、経法を信ぜず、心に遠き慮なくして、各意を快くせんと欲う(このような人は、心の迷いの為に目が暗んで是非邪正の区別もできずに突き当って、經典や教えを信ずる事ができず、将来の事を深く考える事ができないままで、各人は心に快感を懐くことのみを望

んでいる)。

愛欲に癡惑せられて、道徳に達せず、瞋怒に迷没して、財・色を貪狼す(愛情に惑わされて、自分の良心によって善悪を判別して行なう事ができず、満足が得られず常に怒りに落ち込んで、財欲と色欲を狼の如くに貪るようになる。人間の本当の理性から遠く離れてしまうことです)。

これによりて道を得ず、当に悪趣の苦しみ更に更りて、生死の窮まり已むことなかるべし(このような事からの行なうべき道を得ることができず、悪徳の行ないに執著して和しみの中に入り代り、常に苦悩の変化は止まることがないであろう)。

哀れなるかな、甚だ傷むべし(このような事は誠に哀れ

なことで悲しむべき事である)。

或時は、室家の父子、兄弟、夫婦、一は死し一は生きて、たがいに相哀慙し、恩愛思慕して、憂念もて結縛し、心意痛著して、たがいに相顧恋す(或時は、一家族の中で一人は死し一人は生き残って、お互いに哀れみ、愛し、慕い、憂い合い結び合つて、心は悲しみ痛み、互いに恋し合つてゐる)。

日を窮め歳を卒えて、解けやむことあることなし(幾日過ぎてても何年経てもこの悩みは解けて消えることはない)。

道徳を教誨すれども、心開明せず、恩好を思想して、情欲を離れず、昏瞶閉塞して、愚惑に覆わる(自分の良心によつて善惡を分別して行なうことを語り教えても、心は少しも開けて進歩せず、先立つた者の恩愛と親しい付き合いを思い出して、その情から離れることができず、暗く閉ち込められた愚かな惑いに覆われてしまう)。

深く思い、つらつら計り、心自ら端正に、専精して道を行ない、世事を決断すること能わず(仏の教えを深く思い、よくよく心でおし計り、心が自ら乱れた所がなく、専ら精を出して仏道を行ない、俗事を棄てることを決心することができない)。

便旋して竟に至る(心がうろちして定まらない中に生命が終つてしまう)。

年寿終り尽きぬれば、道を得ること能わじ、いかんともすべきことなからん(人生の終りになってしまえば、それから仏の道を得ようと思つてもどうすることもできない)。

総猥慣擾して、皆愛欲を貪る(世の中の乱れに氣を取られて自分の心までもかき乱されて煩わされる)。

道に惑う者は衆く、これを悟る者は寡なし(仏道を学ばずに不安定な日々を過している者は多く、仏の教えを悟って安らかな生活をしている者は少ない)。

世間の思々として、憍頼すべきものなし(世間の人々は非常に忙しく信頼し、たのみとできる人はいない)。

尊卑も、上下も、貧富も、貴賤も、勤苦・思務して、各殺毒を懷く(身分の高い低い、財産の有る無し、世間の事に務め働く人の中には人を殺す心を懷いている者さえいる)。

悪氣窺冥として、為に妄りに事を興さんとす(悪い氣持が心の奥深くまで暗くし、その為に前後の考えもなく教えに背いた事を行なつてしまう)。

天地に違逆し、人心に従わざれば、自然の悲惡、先ず随いてこれに与し、恣に所為を聴して、その罪の極ま

るを待つ（天地の理法に逆らい、人間として持つべき心に従わなければ、それは自然のあるべき相に対する悪である、それ故に自然の真理を説く仏法に随いこの道に入り、自分の思いのままに行なつて、過去の罪の報いを待つべきである）。

その寿の未だ尽きざるに、便ち頃（すなわち）にこれを奪い、惡道に下し入れて、累世に勤苦せしむ（仏の教えを堅固に守つていなければ、寿命がまだ有る中に惡道に墮されて、幾年もの永い間苦痛を受けねばならない）。

その中に展転して、数千億劫も、出ずる期あることなし（そのような中をぐるぐる廻り、無量の年月の間その苦痛から抜け出る時無いのである）。

痛みいうべからず、甚だ哀慙すべし（そのような事は誠に気の毒な事であり、哀れまねばならない）。

これから愚癡に就いて積尊と弥勒菩薩との對話に入ります。

仏、弥勒菩薩と諸の天・人等に告げたもう、我今汝に世間の事を語れり（仏は弥勒菩薩と多くの天上人と衆生に言いました、わたしは今あなた方に世の中の真実の事を語ろう、と）。

人、是を用いるが故に、よりて道を得ず（世間の人々は

ものに執著しているが故に、その為に仏道を得る事はできない）。

まさに、つらつら思い計りて、衆の惡を遠離すべし（間違ひなく、よくよく考えて種々の惡への執著から離れなければならぬ）。

その善きものを及び、勤めて之を行なえ（世間の種々の善惡の中から善いものを及び取つて勤めて行なうようにしなさい）。

愛欲・榮華は、常に保つべからず（愛欲や榮華は常に變化しながら消滅するものであるから、このようなものからは離れるように勤めねばならない）。

皆、當に別離すべし（これらの變化し消滅するものからは離れなければならない）。

樂しむべきものなし（世間には心から樂しむべきものはない）。

仏の在世に曼んで、當に勤めて精進すべし（仏がこの世にいる時に、確實に仏の教えを心から実践しなければならぬ）。

それ、至心に安樂國に生れんと願う者あらば、智慧明らかに達し、功德殊勝なることを得べし（それは、心から

極樂浄土に往きたいと願う念仏修行者があれば、仏の智慧を身に付けて、最も勝れた功德を得ることが出来る。

心の欲する所に随いて、經戒に棄負し、人の後に在ることを得る勿れ（極樂浄土に生まれたいという願いがあるのだから、仏の定めた戒めを守らず、負くことなく、又人の後に従つて修行をするようであつてはならない）。

もし、疑いの意ありて、經を解らざる者は、具に仏に問うべし、當に爲に之を説くべし（もしも、經典の中に理解できない所があるならば、仏に問いなさい、解るように説明してあげる）。

これは仏の大慈悲の現われで誠に尊い言葉であります。

弥勒菩薩、長跪して、白して言う、仏の威信は尊重にして、説きたもう所は快く善し（弥勒菩薩は、跪いて仏に申し上げた、仏の威光は誠に導く、説く所の教えは心に楽しく感じられました）。

仏の經語を聴きたてまつりて、心に貫きてこれに思うに、世人、実にしかり、仏の言いたもの所の如し（仏の教えを直接聴いて心に深くこれを考えて見ると、世間の人が仏の道を得られない事は全く仏の教えの通りであります）。

今、仏、慈愍もて、大道を顯示したまえり（今、仏は慈悲の心から仏道を顯わし示して下さったのである）。

耳目開明して、長く度脱を得たり（自分は仏の教えによつて耳で声を正しく聞くことができ、目で物を正しく見ることができるようになったので、長く苦しみ悩みから離れる事ができた）。

仏の説きたもう所を聞きて、歡喜せざるものなし（仏が説明して下さった教えを聞いて心から喜ばない者はなかった）。

諸の天・人民・蠕動の類、皆慈恩を蒙りて、憂苦を解脱せり（諸の天上人や人間やみずのような虫けらのようなものまでも、仏の慈悲を受けた為に憂いや苦しみから離れる事ができた）。

仏語の教誡は、甚だ深く甚だ善し（仏が語る教えや誡める事は、その意味は非常に深く勝れているものである）。

智慧は明らかに八方上下、古來今の事を見せなわして、究竟せずということなし（仏の智慧は明らかに宇宙全体の過去・未來・現在の總ての事を御覧になつて最終的には皆見て知ることができる）。

今、我が衆等、度脱を得ることを蒙る所以は、皆、

仏の、前世に道を求めたまいし時、謙苦されしが致す所なり（今、わたしの教えを信じた衆生が修行して悟りを得たわけは、皆仏が過去に師に身をへり下って勤めて下さったお陰である）。

教えはまだ続きますが、今まで説かれていた事を、自

身とその周囲の事に就いて当てはめて考えて見ますと、今まで気が付かなかった事が種々浮き彫りにされて、そこから大きな功德が得られます。これが仏の光明を得る事だと思えます。

（了）

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施〕
『浄土』四十五巻・四月号以降

諸物価の高騰と諸般の事情により、しばらく頑張っていました当法然上人鑽仰会の会費を、従来の一年分二、〇〇〇円から、表掲の一年分二、五〇〇円の新会費に値上げさせていただきます。新会費を実施するのは、一応本年昭和五十四年の四月『浄土』四十五巻、四月号）以降からといたします。諸種の便宜をはかり、充分に意を尽しことに当るつもりです。どうか会員の皆様の暖かいご配慮とご援助をくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(空三)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

かった。不貞として、なじりたくもない。

人間が、それも中年期をむかえた男女が、身も心も燃え上がるということは貴重な現象だ、と定家はかねてから信じこんできた。彼自身も殿中でわが子のように年若い女御に懸想したり、一時期は七つも年上の卿二位兼子の肉体に憧憬したこともあった。

だが、いつの場合も炎はおのれの身内だけで立ち昇り、生きてゆくうえの熱源となった。妻の炎もそれと同質であることは、信ぜられた。

今日、妻は卿二位兼子の私邸へ出かけた。古い桂(うちかけ)で我慢をし、網代車も近所の中納言の内室に陪乗させてもらった。兼子の逆修儀に列するためである。

一

「女が、そのお方となら、お互い白骨になってまで愛し合いたい、と想う殿御が、やっぱりいるものですわね」

妻は閨房のなかで、一語ずつ囁みしめるように言った。浮かれているのではない。定家は、じつとそんな妻の口もとを凝視する。

「殿下のことだな」

「女の正体が鬼だったとしたら、あのお方の肉を、一片も余さずにむさぼり食べてしまいたくなるの」

今宵の妻は異常なまでに昂ぶっていた。
年がいてもない、と定家は常識を楯にして嘲笑したくな

＜閨房の二人＞



前号のあらすじ

鎌倉時代のはじめ、源頼朝を棟梁として出発した幕府の体制も、次第に北条氏の支配管理のもとに統制されて行った。しかし、老獪な後鳥羽上皇を中心とした京都の勢力も決してあなどれるものではなく、その対立は深く根をおろしていた。そうした時代に、法然上人の説かれた専修念仏の教えは、次第に民心の奥深く浸透し、専修教団は大きくふくれ上がった。当然そこには、南都北嶺の旧仏教側との対立があったことはいなめない。

こうした時代に、あの有名な歌人藤原定家も活躍していたわけで、その日記『明月記』は、九条兼実の『玉葉』に比してもおとらない程、法然の時代をよく写している。そして定家もまた、念仏信仰への煩悶を繰り返していた当時の一知識人だったのである。

逆修とは、出家とまではゆかぬが、生前に戒を受け法名を授与される仏事である。

逆修の席で、妻はたえず視線を九条殿下に注いでいたらしい。男の魅力を肌の裏側にまで浸透させられてきたようである。

九条殿下とは兼実の次男良経だった。もちろん妻は彼と初めて会ったわけではない。それどころか若いときから四季ごとに何らかの機会に一度ぐらいいは見てきたはず

である。夫の定家は九条家の家司だったからである。

夕景、帰邸すると妻は異常に昂ぶり、定家を閨房へ誘
ぎなつた。いわば良経から焼きつけられた性の烙印を、
夫の肉体に移し替えたようなものである。

「殿下のどこが？」

定家は無器用な訊き方をした。

「どこがって……全部だわ」

「全部か」

「殿下を見ていると、人間の滅んでゆく美しさみたいな
ものが感じられてならないの」

「滅亡の美か。女が、それも中年になった女が最も魅か
れる小籠だ」

「この世を生きていることを、最初から放棄しているみたい
なの。かと言って無頼でも自暴でもないのね。真面目に
生きようとはしていच्छしやる。そんなお方を眺めてい
ると、強く抱きしめて……」

「そして、一緒に滅んでしまふわけだ。白骨になってま
で」

妻は九条良経の本領を正確に見抜いている、と思った。

定家は、良経の若き日の歌も胸で詠みかえしてみる。

すさまじく牀も枕もなりはてて

幾夜ありあけの月を宿しつ

兄良通の急逝に遇った二十一歳の若者が、大胆に虚無
をうたいあげて、定家たちを驚かせた。作って出来る歌
ではない、と父の俊成も激した。

良経はこのあとも天才歌人を実証するような感性鋭い
歌を次々に詠んだ。

恋ひ死なむ身ぞと言ひしを忘れずば

此方の空の雲をだに見よ

忘るなよたのむの次を立つ雁も

稲葉の風の秋の夕ぐれ

長兄良通の死によって家督を継いだ良経は、ただちに
内大臣となる。久我通親の奸策によって宮廷への出仕を
一時停止されたが、官位は奪われなかった。通親が死ん
で左大臣、さらに太政大臣にまで昇りつめた現在であ
る。位(くらい)人臣をきわめたわけだ。

だが良経を権力者と思う者は一人もいないであらう。

三十二歳の正治二年八月、良経は妻を喪った。鎌倉頼朝の妹、一条能保の娘だった。いわゆる政略結婚で、良経はこの妻を疏んじてきた。にもかかわらず死別されると二日後、突如逐電してしまふのである。左大臣の身を山崎あたりの荒野を放浪させる。亡妻を恋うての放浪であつた。

歌ごろが、この国上流社会における「自由」を象徴する唯一つの表白であつたとしたら、良経こそは生まれながらの「自由人」だつたであらう。しかもその「自由」には、そねに滅びの美が付きまといつてゐる。それほどに撰閣政治の権力構造は頑陋であり、閉鎖的であつた。定家は「自由人」良経を限りなく愛し、同時に嫉んだ。

送られてくる歌をおしてただだが、定家は後年になつてこの良経と酷似した人間像を鎌倉將軍実朝のなかに発見する。実朝もまた滅亡の「自由人」であつた。

「近ごろ殿中では坊城大納言どのが内大臣に進叙なされるという噂がしきりだ」

定家は妻の身体を離れると、窓ぎわの脇息に倚つて口調をあらためた。

良経がもたらした性の熱風が夫婦の間を吹き抜けて去つた。ロマンの世界から彼らは現実へ回帰した。

坊城大納言とは、妻の父親である。西園寺実宗である。

「正二位権大納言になられたのが文治五年でした」

あれからもう十数年が過ぎた。然るべき大臣の地位に就くのは当然であらう、と妻は言いたげである。さすがに貴族の家に育つてゐる。地位の進叙には敏感だった。

だからこそ妻は、夫定家の遊泳術の拙劣さに平常から不満を洩らしてゐる。

「坊城大納言どののもとに念仏者が瀬々と出入りするそうだな」

「そうですか」

妻は夫ほどそんな現象に神経質ではないようだ。

「専修の徒と交流するのが、果たして舅どのにとつてお得かどうか」

「専修の徒、とおっしゃるのは法然ご房のお弟子さんたちのことではないでしょうか」

「そうだ」

「法然さまの教えなら、間違ひのある道理はありませんまい」

「うむ、法然ご房はご立派だ。ただ弟子のなかにいかがわしい者がいる。鎌倉の武士どもに強くつながつて、あれこれと画策しおる。院（後鳥羽上皇）は毛虫のようにお嫌いじや」

「九条殿下（兼実）も法然さまのお弟子になられたのでしよう」

「九条家とて、行く先どうなることやら。だからわしは手を切らせて頂いたのじやよ」

兼実が法然を戒師として出家の素懷を遂げたのが建仁二年（一一〇二）正月二十八日である。直後に定家は九条家の家司を辞任している。後鳥羽帝側近たちの反法然體質を敏感に汲み取ったからにちがいない。

それだけではないにしても、この一一〇〇年前後における貴族たちが法然の専修念仏に神経質になっていることはたしかである。

二二

藤原定家の妻の父西園寺実宗は、この翌年の建永元年十一月、法然を戒師として出家する。

定家は「明月記」の十一月二十七日の項で誌るす。

天晴ル。後ニ聞ク。大臣殿已ニ遂ゲシメ給ウ。法然房戒師、法印剃リ奉ル。家信、被物ヲ取ル。盛親、布施ヲ取ル。（綱）納言、野剣・衣帽・直衣ヲ取ラル。髪ヲ削ルノ後、染衣ヲ著シテ受戒シ給ウト

実宗は元久二年の十一月に内大臣に進叙している。この建永元年の三月に辞しているが、慣例で前官名を定家は呼ぶ。意識して受戒の模様を事務的に淡々と叙述する。思想面に触れることを避けている。「後ニ聞ク」も逃げた姿勢が明確だ。こうした日記は、万一の場合、物的証固になり兼ねないからである。

形式上、法然を戒師に選んだのではないことは明らかだ。西園寺実宗は、建暦二年（一一二二）法然が亡くなった直後、初七日に諷誦文を献じて法然の遺徳をしのんでいるからである。

「四十八巻伝」は初七日の導師を信蓮房として、檀那大宮入道内大臣実宗公からの諷誦の文に云わく、「夫レ以テ先師在生ノムカシ弟子朝ヲ逃ガレシタベ、一心ノ精誠

ヲ凝クシテ十重禁戒ヲ受ク。カルガニエニ濟度ヲ彼岸ニ
タノミ、敢テ諷誦ヲコノ砌ニ修ス。小善根ヲ嫌ウ事ナカ
レ。必ズ大因縁タラン。伋チ蓮台ノ妙果ヲ飾ランガタメ
ニ夙ク霜鐘ノ逸韻ヲ叩ク」とある。

実宗はこの建暦二年十二月八日、六十九歳で他界して
いる。定家はその日に坊城邸を訪問する。俄かに衰弱
し、回復の道がなくなる。「憑(たの)みて念仏すべき由、
仰せられて臥し給う。仍て法印の僧都の許に告げ申す、
が馳せ参ずるの間、御言語に及ばず終らしめ給いおわん
ぬ」と定家は「明月記」に書く。そして、このあと実
宗の一生を総括して、善人ノ命ヲ終ウ、スデニカクノ如
シ、不思議ト謂ウベシ、と「善人」を規定するのであ
る。どういう意味で実宗が善人だったのであろうか。

舅の臨終の看取りながら、定家の胸に父俊成から聞か
された治承四年の以仁王叛乱時における西園寺実宗の姿
が沈黙の柱となって浮かびあがったのかも知れない。善
人だけが持っている勁直な姿だった。

以仁王は後白河法皇が高倉三位成子との間に儲けた親
王である。平氏の横暴を破砕すべく全国の反平氏勢力に
厥起を促す令旨をばらまき、自らも兵を挙げた。

以仁王があと二年生きのびていたら、この人の運命は
榮光に輝いたはずである。彼の令旨を奉じて挙兵した源
家頼朝が二年後には平氏を圧迫、また同じ木曾義仲が三
年後には入京してくるからである。だが源三位頼政とも
ども宇治川で脆敗、彼自身も同年の五月、綺田川原で敗
死した。

以仁王が死んだ直後、禁中ではこの叛乱の処分詮議が
おこなわれた。中条久我通親は嚴罰を主張した。背後勢
力であった南都衆徒の征伐、莊園の収奪、さらに以仁王
に連なる一族の追求だった。当時の通親は平氏の姻
戚、その発言は平清盛の代弁と考えねばならなかった。

公卿たちが黙りこんでしまふなかで、ひとり強硬に反
論したのが西園寺実宗である。ふだん寡黙穩和な彼が敢
然と平氏の代弁者通親に咬みついたのである。

追求は以仁王一人に限定すべきだ。一族の者でこの叛
乱に連座した者なぞ唯一人いないではないか。

実宗の意図もはっきりしている。以仁王の一族ともな
れば、母親の高倉三位成子の線から三条家へ累が及んで
くる。三条家は実宗の本家でもあった。

意外な反撃に通親もひるんだ。九条兼実たちが同調し

たからである。妥協案として、以仁王は死は未確認、それまでは処分を見合せる、ということになった。

以仁王が綺田川原で死んだのは明白な事実だった。だが首級があらぬのを楯に、朝廷はしきりと以仁王生存説をふりまいて未確認の裏付けとした。九条兼実などは日記「玉葉」でくり返し生存説を書いている。源三位頼政ともどもに駿河から奥州へ向ったとか、伊豆へ下着したとか、綺田川原の首なし死体は以仁王侍者の菅冠者のものであるとか、吉野に生存しているとか。

西園寺実宗が投じた一石、三条宗家を守りきろうとする勇気が、怯懦で日和見主義の公卿たちを一致団結させた。平氏の代弁者だったはずの久我通親までが、いつか公卿側にまわってしまうことになった。

廟議がいつまでも決定に至らぬのに業を煮やした平清盛は、独断専行、暴挙に出る。南都焼き打ちを命じたのである。これが如何に暴挙、愚挙であったか。

清盛自身はその直後に熱病で死ぬが、平氏の後裔たちは非難の渦へ投げこまれる。南都焼き打ちさえなければ、西国へ落ちてゆく平氏に、もっと同情は集ったであろう。朝敵ばかりか法敵の汚名さえかぶって、西海の藻

屑と消え去った。

それはともかく、廟議を逆転させた西園寺実宗の勇気は、父俊成の口から定家の胸底深く刻みこまれた。

身に一片の野望もなく、平生は無能無策、昼行灯にも似ていた。ところがひとたびお家の大事ともなれば勇気凛々、平氏という超權威にも敢然と立ち向ってゆく西園寺実宗。欲の薄い足跡だっただけに、定家は「善人ノ生涯」と総括したのであろう。

さらに「不思議ト謂ウベシ」の風憶には、実宗の独立独歩、勁直な精神への驚きが盛りこまれている。命終に臨んで懺法を求めず、善知識の到着を待望するでもなく、ただ念仏をとるだけで正念往生できた姿に、である。定家自身は生涯、専修念仏を嫌いとおした。というよりも恐れ続けた。だから「不思議」としか叙述できなかったようである。

三

ところで天才歌人、九条良経。彼の滅びを憧憬する境涯に、以仁王一族が意外に根強くかかっている事実も見逃してはならない。

ふるさとの春を忘れぬ八重桜

これら見し世に変わらざるらむ

良経が二十八歳の詠である。その詞書に「前齋院大炊御門におはしましける頃女房の中より八重桜につけて」とあり、ただちに返歌が贈られている。

八重桜折り知る人のなかりせば

見し世の春にいかであはまし

返歌の主は誰であったか。後白河法皇の内親王式子である。母は高倉三位成子で、以仁王とは同腹の妹にあたる。生涯を独身でとおした。幼くは賀茂斎院の神域に封じこまれ、老いては承如房と呼ばれて出家している。彼女の肉体は、線細な感覚で詠みこまれた歌でしか感ずることができない。

相聞歌の当時、式子は大炊御門邸に住んでいた。そこは九条家の迎賓館のようところで、すぐ直前まで良経の住居だった。

齋院ノ宮から出家承如房。その間隙を縫って式子が「女」であった短い期間に九条良経との歌の交流がある。当然、愛の心もかよい合ったことであろう。

愛の心——妙な言いまわしだが、性をともなう愛が成立したとは何としても信じ難い。この相聞歌時、良経は二十八歳、式子は四十路へ深く分け入っていた。

その愛の心。お互いが求め合うゆくては、滅びの美領域だったにちがいない。

式子には兼仲事件に連座という危機があった。兼仲という三条公時の後見役だった男がいた。彼の妻に後白河法皇の怨霊が乗りうつり、「われを祀る社を建て、社領を寄進せよ」とふれまわったのである。結局、ためにする妖言、ということになったが、式子内親王あたりがその流言源だ、と讒訴された事件である。結局式子は無関係である事が判明した。だが、宮廷内外からのうとましい視線を消除することは出来なかった。

良経の失意。そこにはわが父兼実の功利性、というよりも自分自身までふくめた貴族社会のいぎたない打算が、若い貴公子の胸を掻きむしった。

以仁王に愛妾がいた。盛章朝臣の娘で三位局と呼ばれ

＜池畔に立つ式子＞



た。以仁王との間に姫を生んだ。この姫は以仁王の財産所領の相続者に認定されていた。ちなみに以仁王は八条院領という宏大な莊園を保有している。

西園寺実宗の「以仁王敗死の未確認」が通らなかつたら、当然平氏の所有に帰していたであらう。いや、半分は久我通親のものになっている。

兼実が「未確認」説を支持した裏にこの八条院領がある。兼実は未亡人となった三位局と情を通じ、男児を生ませたのである。後に太政大臣にまでなった良輔である。兼実はこの良輔を八条院へ猶子として送りこむ。

八条院の主は式子の姉亮子（殷富門院）であった。これで父兼実は宏大な所領をわが所有になし得たとほくそ笑む顔を、良経は朝夕に見せつけられていた。

兼実の故人となった以仁王へのふれかたもまことに功利的である。鎌倉頼朝と深く接触しているときは「一品ノ宮」であり、頼朝が宮廷へのパイプを久我通親に差し替えてからは「刑人」に落してしまふ。

純情な良経には耐えがたい父の態度であった。

落魄美に憧れる良経と、現世のすべてから断絶しようとする式子であった。彼らはお互いの作歌を味読し合

うことだけに生きがいを感じた。三十一文字をとおして恋し合ったとも言える。

暮れやすい晩秋であった。

網代車が犬吠御殿の門前で停まった。公達が降り立った。良経である。

もの馴れた邸内へはいつていつた。しかし、庭先を徘徊するだけで、いっこうに建物の内へは立ち寄ろうとはしない。

池があった。良経はその岸辺に腰をおろし、何かをじっと待った。

黄昏が通り魔のように過ぎ去って、やがて犬吠殿は闇に包まれかけた。

そのころ、建物の内から細い人影が庭先へ降り立っていった。式子である。

べつに二人は、しめし合わせたわけではない。それどころか、お互いに今宵逢うという約束もなければ、予感もなかった。

式子は池のほとりへさまよい出た。丁度、対岸の草むらに良経が坐りこんでいる。未だ気づかない。

式子は池の面を見つめながら何やら口で呟いている。

その呟きで、良経の方が先に式子の所在に気づいた。

「未だ月は出ませんね」

池越しに声をかけた。

「いつ、いらしたのですか」

「俄かに犬吠殿の月がなつかしくなりましてね」

お互いに動きはじめた。池のふちをまわって、大声をかけずともしやべれる距離へ近づくとした。

良経は、じきに笑いだした。

「そちらへ向っては駄目ですよ」

何たることぞ。お互いが同じ方向うまわりはじめたのである。これではいくら歩いても池半周の距離は縮まらぬであらう。

「あなたの方こそ、逆に歩いてきて下さい」

「では、私がゆきましよう。あなたは動かないで」

式子は足を停めて、良経が近づくのを待った。

近ごろ、しきりと足首が痛む。歩行が困難になっている。

待つ時間の楽しさを、式子は満喫した。

自分は今宵の月が見たい、と願って庭へ降り立ってきたのである。良経も同じ求めでわざわざ犬吠殿へやって

きてくれた。この共感がたまらなく嬉しい。これ以上の密会があり得るであろうか。

ついに良経はかたわらへきた。

月は未だ出ていない。池の面は黒々とした影でおおわれていた。

「さっきから、おひとり何やらぶつぶつ呟いていられたね。あれは、何ですか」

良経は訊いた。

「お念仏です」

「あ、念仏ですか。そうだ、あなたは先年落飾したのでしたね」

式子が出家したのは建久五年のことだ。一昨年になる。「いいえ、あのときは形ばかりでした。いまわたしは、女に戻っています。そして、ほんとうの出家を致しました」

「そう言えば、髪も……」

夜目ではあったが、式子の年齢には不相応とも言える白髪がくっきりと浮かび出ていた。

「この髪が出家した証固でございます」

良経は、ようやく式子が語る言葉の不条理に気づいた。

「落飾とは髪を削ることでしょう。髪を戻して、還俗することがなぜ出家なのですか」

「法然ご房の教えだとそうなります」

「法然ご房？ あなたの専修だったのですか」

「毛虫でもさわるようなお顔をしないで下さい」

「しかし、専修念仏の徒は、いやしい連中なのではありませんか」

「お父上の殿下も近々法然さまの門中へはいられるということですよ」

「父が……そうですか」

良経は、宗教に殆んど関心がない。関心をいだかぬように自らへ強要してきたフシもある。落魄美を求める者が、魂の救済を願う必要がどこにあるのか。

「まあ、理屈っぽい話はやめましょう。先日のご返歌、とても嬉しく思いました」

「お気に入りまして？」

式子は小娘のように顔を赤らめている。でも、この間だった。良経に覗かれる道理はない。

「気に入るも入らぬも、あなたの歌です。春からこの邸に住んで、とても幸福そうですね。歌にそのお気持がこ

もっています」

「それは幸福です。草花があります。鳥も来てくれます。それに、池には月が……ああ、出ましたよ」

邸内に光があふれた。暗黒色の池面が銀色に変じつつある。月がさしのぼったのである。

二人は肩を並べて草むらに坐りこんだ。池面に落ちている月影をじっと眺め入る。

やがて式子は言った。

「すさまじく牀も枕もなりはてて……妻いようなお歌でしたわね」

「今にして思うと、かなり気おっていますね。すさまじく、なんて余り気に入りません」

「そうでしょうか」

「ほんとうの気分、一寸違ってたんですよ」

「どうお違いだったの」

良経はあの二十一歳の秋を思いうかべながら語って聞かせる。

兄の良通が急逝し、わが家は空洞になった感じだった。死というものが狼藉にも侵入してきて、これまでの暖かいものを、すべて収奪していった感じだった。家具のす

べてにふし穴が開いた。建具も隙間だらけになった。

家人の心も荒れた。母はめそめそしているし、父の兼実は他出、外泊ばかりしていた。

良経は、ある晩、寝つかれぬまま板敷を高く開け放った。いとと同じ晩秋で、肌寒い夜気があふれこんだ。でも我慢をして牀へ仰向いた。

折から差しこむ月光が、その牀を濡らした。枕も濡らした。

月光に濡れた闇。良経はいまの自分が最も安眠出来るように思われた。

歌に詠みたかった。詠んでみたのである。
でも、*「すさまじく」*は嫌だった。*「有明の月を宿しつ」*も窮屈だった。

「ほんとうの気分はね」

良経はいきなり立ち上がった。思わず式子は、あり得ぬこととは知りつつも身を引いた。

「あの月光の浮かぶ池のなかへ飛びこんしまいたかったのですよ」

さすがに行動は制禦した。良経は言葉だけで綴った。

(つづく)

二 編集後記 二

○幕末の藩政家橋本左内の言葉——「交友の中に損友と益友あり。これを選ぶ事肝要なり。益友とは、その人、剛正毅直なるか、豪壮英果なるか、俊邁明亮なるか、闊達大度なるかを出す。彼の損友は、倭柔善媚、阿諛逢迎を旨として、浮躁弁慧、軽忽粗慢の性質ある者なり」とある。想うに私自身、剛正毅直、豪壮英果、俊邁明亮、闊達大度のありよう、いずれも自信なし。三十二歳の世渡りの結果は、まだまだ若輩ながら、すでに倭柔善媚、阿諛逢迎の生活に没し、浮躁弁慧、軽忽粗慢の性格を脱していない。省みて、疲労と倦怠の感しきりである。時に、上の言葉は、橋本左内十五歳の折の著書『啓発録』の中の一節である。○一方、江戸中期の儒者佐藤一斎は、『言志四録』の中で次のように記している。「僚友に処するには、須らく能く肝胆を披瀝して、視ること同胞の如くなるべし。面従す

可からずと雖も、而も亦乖忤す可からず。党する所有るは不可なり。挾む所有るは不可なり。娼疾する所有るは最も不可なり。はたしてここでも、追従や違背、徒党を組んだり、自慢したり、そしてもっともいけないこと、嫉妬と憎悪とをきびしくいさめている。そしてこれらの言葉に接しても、私自身の反省は、ただただうしろめたい想いばかりである。なお佐藤一斎の『言志四録』は、『言志録、言志後録、言志晩録、言志垂録』の四録からなり、一斎四十二歳から八十二歳までのおよそ四十年間に累々と書きつがれたものである。右の引文は、一斎六十七歳より七十八歳までの約十二年間の語録である「言志晩録」中のものである。

○梅雨入りのうっとうしい季節六月。なぜか心気もふさがちである。微くさいこの時節、せめて心の中だけは清くすがすがしく、明るくありたいのだが……。

梅雨空の俄かに裂けし日射かな 夢声

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 六月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十四年五月二十五日 印刷
昭和五十四年六月 一日 発行

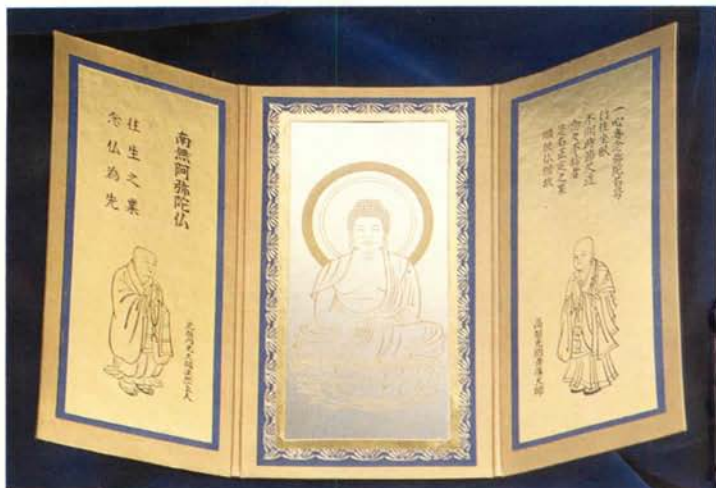
編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒101 振替東京八一八二一八七番

=新発売= ねん じ ぶつ
念 持 仏



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円（五十体以上は一割引）

送料 一体 200 円（五十体以上は無料）

●寸法 21.8cm × 14cm 3枚折・実用新案登録済＝番号53-044860号

（発売元）〒153
東京都目黒区目黒4-16-12
株式会社 泰 童
TEL (03) 711-6006

（取扱い）〒102
東京都千代田区飯田橋1-11-6
法然上人鑽仰会
振替(東京)8-82187番